京埋セ現地説明会資料 23-1
令和5年7月 15 日（土）

法貴古墳群（ほうきこふんぐん）　第１・２次調査

調査場所　亀岡市曽我部町法貴地内
調査期間　第１次：令和４年５月18日～令和５年２月24日
　　第２次：令和５年５月６日～令和６年２月下旬（予定）
調査機関　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

法貴古墳群は、霊仙ヶ岳（れいぜんがたけ）の山麓に造営された古墳群の１つです。発掘調査を行った法貴56号墳では、埋葬時の状態を保った形で副葬品が見つかりました。床面には４点の須恵器蓋杯を組合せた部分があり、被葬者の頭を固定していたと考えられます。

56号墳　遺物出土状況

人を送る新しいかたち
火葬墓ＳＸ08

火葬墓の墓壙（ぼこう）は、長軸約1.8m、短軸約1.2mです。墓中には２つの四角い木製容器が納められ、木製容器１からは、奈良時代前半の須恵器平瓶（ひらか）、蓋杯、火葬された人骨が見つかりました。

『続日本紀（しょくにほんぎ）』によると、文武（もんむ）４（700）年に僧道昭（どうしょう）が日本で初めて火葬されたと書かれています。このことから火葬が採用されて間もない時期のお墓と考えられます。

写真３　火葬墓ＳＸ08全景（北東から）

まとめ

今回の発掘調査では、北部九州系の特徴を持つ56号墳や奈良時代の火葬墓ＳＸ08などが見つかりました。

法貴56号墳は、古墳時代後期中ごろの横穴式石室と考えられます。石室の形や副葬品の内容は、千代川町の北ノ庄13・14号墳とよく似ています。これらの古墳は、古墳時代後期中ごろに亀岡一帯へ横穴式石室が導入された時期の古墳と考えられます。また、飛鳥時代になると、横穴式石室ＳＸ19のような小規模な石室墳が築造されます。

一方、奈良時代になると、新たに火葬墓が造られます。火葬墓は、古墳を避けて造っていることから、奈良時代になってもこの一帯が人を葬る場所、すなわち「墓域（ぼいき）」として認識されていたことを示しています。火葬墓の採用は、仏教の伝来による葬送儀礼（そうそうぎれい）の変化が背景にあったと考えられます。

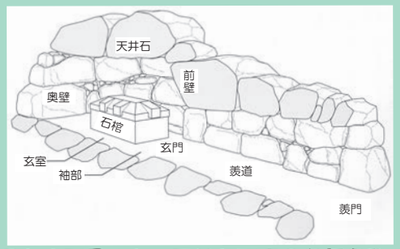
今回の調査では、法貴古墳群の始まりと終わりの状況がわかる成果が得られました。また、古墳群と同じ所に火葬墓が造られたことは、法貴古墳群一帯が「墓域」として意識され、地域の有力者たちが連綿と埋葬され続けたことを示しています。

また、墳丘や周溝の一部を調査した51・53・55号墳は、石室や墳丘の裾部が明らかとなり、その位置が工事対象地の境になることから現地保存されることになりました。

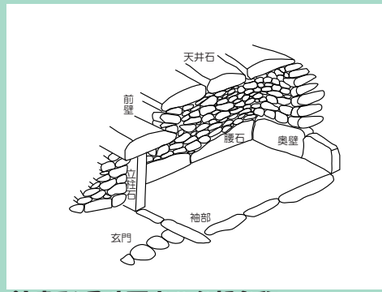
～横穴式石室について～

古墳の各部名称

- **墳丘（ふんきゅう）**：石室をおおった盛山のこと。
- **墳丘内列石（ふんきゅうないれっせき）**：墳丘内に配置された石列で、墳丘の盛土が流れ出ないようにするための施設。
- **横穴式石室（よこあなしきせきしつ）**：石を積んで造った遺体を埋葬する空間。実際に遺体を安置する部屋を玄室（げんしつ）、玄室につながる通路を羨道（せんどう）と言います。
- **玄門立柱石（げんもんりっちゅうせき）**：玄室の入口に配置された縦長の石材
- **腰石（こしいし）**：石室の最下段に配置され、ほかの石に比べて大きい石材。
- **閉塞石（へいそくせき）**：石室をふさぐ石材。
- **周溝（しゅうこう）**：墳丘のまわりをめぐる溝のこと。

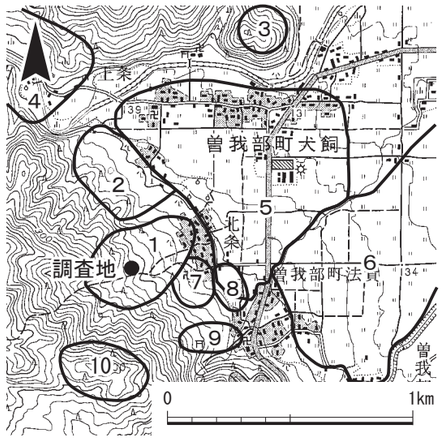


これまで見つかっていた石室の各部名称
近つ飛鳥博物館 2007
『横穴式石室誕生　黄泉国の成立』より転載



法貴56号墳石室の各部名称（復元イメージ）
柳沢一男 2007『ドイツ展記念概説 日本の考古学〈普及版下巻〉』記載図トレース・加筆

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
http://www.kyotofu-maibun.or.jp



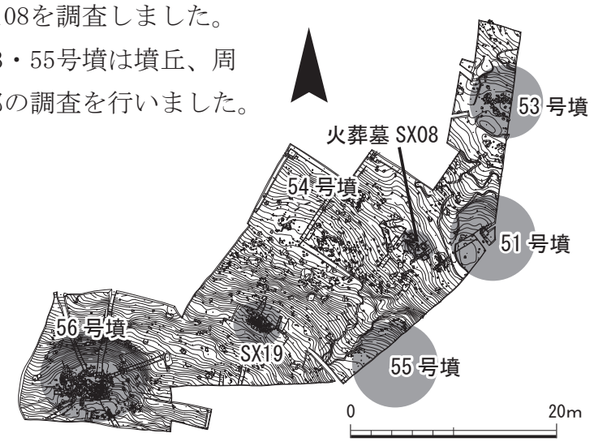
第１図　調査地位置図（1/25,000）

1．法貴古墳群　2．法貴北古墳群　3．犬飼城跡　4．犬飼古墳群　5．犬飼遺跡　6．金生寺遺跡　7．慈雲寺裏山古墳群　8．法貴館跡　9．法貴南古墳群　10．法貴山城跡

はじめに

今回の発掘調査は、国道423号（法貴バイパス）の建設に伴い実施しています。法貴古墳群は、66基からなる古墳群で、今回が初めての発掘調査になります。調査対象地内に所在する51・53～56号墳の発掘調査を実施しました。また、新たに見つかった石室ＳＸ19、奈良時代の火葬墓ＳＸ08を調査しました。

51・53・55号墳は墳丘、周溝の一部の調査を行いました。

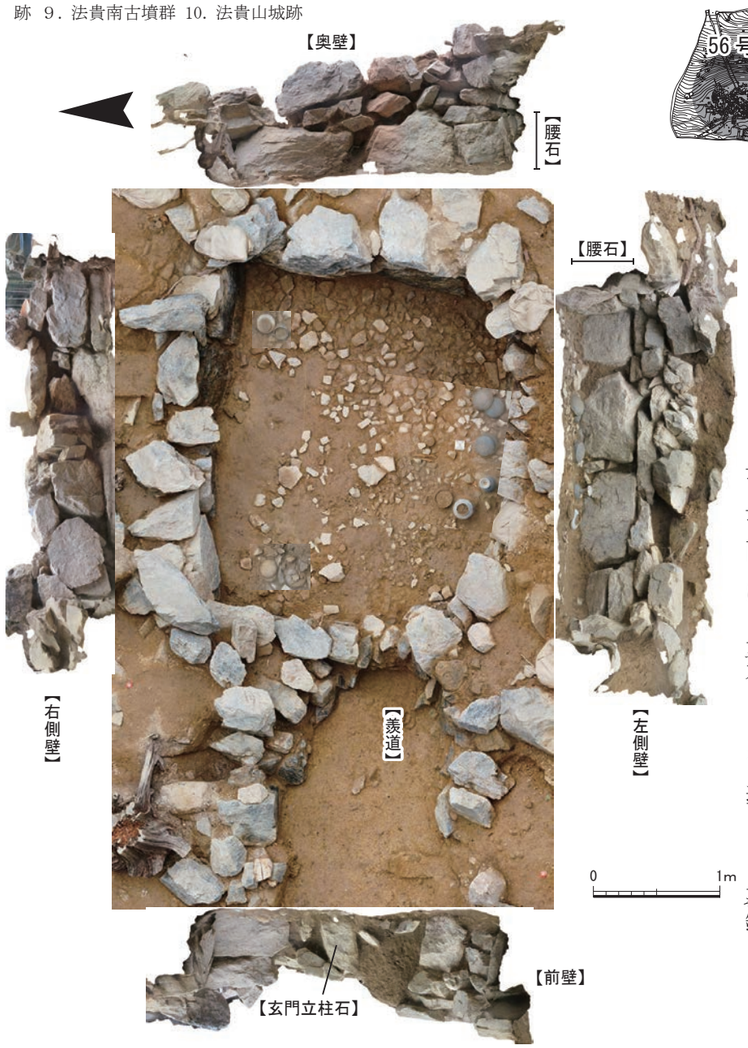


第２図　法貴古墳群Ａ地区　平面図

墳丘を護る石材　墳丘内列石

56号墳の墳丘裾からは長軸40㎝大の石材が見つかりました。この石材は、墳丘が崩れないようにする目的で置かれたと考えられます。土層の観察から列石は墳丘の中に完全に埋まっていたと考えられます。類例として、法貴北５号墳・法貴峠20号墳（亀岡市曽我部町）、医王谷（いおうだに）３号墳（同市下矢田町）でも見つかっていることから、周辺地域で広く用いられた墳丘の構築方法だったと考えられます。

写真１　法貴56号墳全景（北東から）



第３図　法貴56号墳石室平・立面画像

法貴古墳群　始まりの古墳？
法貴56号墳

径約14ｍの円墳で、石室は幅2.0ｍ、長さ2.4ｍです。ほぼ正方形の玄室に、長さ2.0ｍの羨道（せんどう）が取り付き、石室は南西に開口しています。玄室（げんしつ）は腰石（こしいし）が四方に巡り、その上にやや平たい石材を積み上げます。玄門部（げんもんぶ）には縦に長い玄門立柱（げんもんりっちゅうせき）石があります。

以上のような石室は、北部九州に起源をもつとともに、南丹地域の横穴式石室導入期の特徴と言えます。

床面には約10㎝大の石が敷かれ、その上面から須恵器蓋杯（すえきふたつきたかつき）、高杯、短頸壺（たんけいこてつ）、鉄鏃（ぞく）が副葬品として見つかりました。出土した副葬品から古墳時代後期中ごろに造られたと考えられます。

おひとり様専用？小さな石室墳
横穴式石室ＳＸ19

無袖式（むそでしき）の横穴式石室を埋葬（まいそう）施設とする古墳です。今回の調査で、新たに見つかりました。墳丘は流出し、正確な墳形や規模は不明ですが、円墳と考えられます。玄門付近には閉塞石（へいそくせき）が残っていました。床面には15㎝大の石が敷かれています。石室から副葬品は見つかりませんでしたが、無袖で小規模な石室であること、周辺から出土した土師器（はじき）から、古墳時代の終わりから飛鳥時代ごろの石室と考えられます。

写真２　横穴式石室ＳＸ19（南東から）

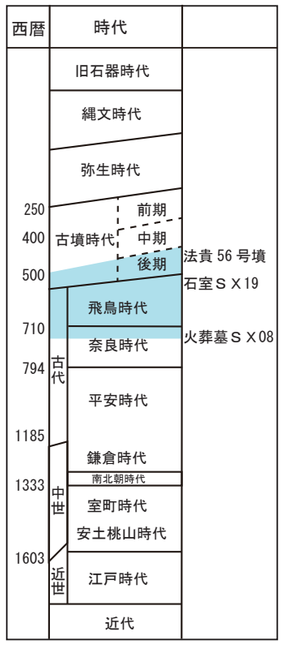
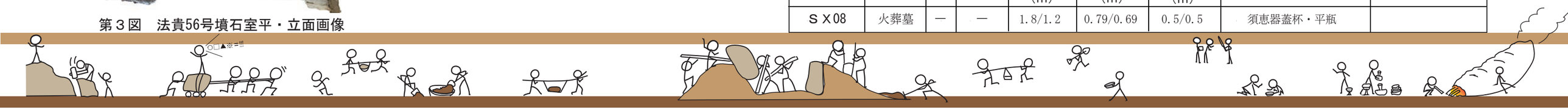


表　埋葬施設規模等一覧

	石室形態	袖部	墳丘規模（m）	石室全長（m）	玄室全長（m）	奥壁幅（m）	出土遺物	備　考
56 号墳	横穴式石室	両袖	14.0	4.4	2.4	2.0	須恵器蓋杯・高杯・短頸壺 鉄鏃	北部九州系石室
ＳＸ19	横穴式石室	無袖	不明	2.4	1.6	0.7	――――	周辺から土師器直口壺
	埋葬方法	―	―	墓壙 長軸／短軸（m）	木製容器１ 長軸／短軸（m）	木製容器２ 長軸／短軸（m）	出土遺物	備　考
ＳＸ08	火葬墓	―	―	1.8/1.2	0.79/0.69	0.5/0.5	須恵器蓋杯・平瓶